

短期大学の情報教育における SA の試み

吉田 有里果*1・辰島 裕美*2
Email: arikayou17@gmail.com

*1: 金沢星稜大学女子短期大学部経営実務科

*2: 金沢星稜大学女子短期大学部 講師

◎Key Words : SA, 情報リテラシー, 授業支援

1. はじめに

金沢星稜大学女子短期大学部の情報リテラシーに関する授業は、学生が主体的に取り組み、スモールステップで目標を達成しながら基本操作を習得するという目的で、検定試験の対策学習を取り入れている。2015年度に初の試みとして、2年次生がスチューデントアシスタント(SA)として情報リテラシーの授業に加わり1年次生のサポートを行った。

本学では、すでに2年前から簿記の資格試験対策に2年次生が1年生の質問に答えたり、相談に乗ったりする簿記アワーというシステムがある。資格試験対策のサポートという点が共通であるが、情報SAは授業のサポートであるのに対し、簿記アワーとは活動の時間帯などのシステムに多くの違いがある。情報SAとして1年生の質問に答えることが、先輩として与える影響と、授業の場における存在の意味について論じる。

2. 当該授業とSAの概要

2.1 2014年度の情報系授業

2014年前期の「コンピュータリテラシーI」は、学生約80名のクラスで教員がメインとサブの2名体制で週1回の授業が行われた。コンピュータサービス技能評価試験(CS検定)のワープロ部門3級と表計算部門3級の取得を目標に、前期の前半7回がワープロ、前期の後半7回が表計算というシラバスであった。

2.2 SAの募集

2014年度が終了する頃、2015年度の授業を担当する教員が、情報SAの募集を行った。その条件は、春休みを利用してマイクロソフトオフィススペシャリスト(MOS)Excelの資格取得対策で実力を高めることであった。筆者は、2014年前期のCS検定の表計算部門3級取得だけでは満足できなかったため、MOSへのチャレンジを好機ととらえた。友人と得意な科目を教えあうことは、互いにメリットがあると感じていたため、先輩にPCの操作を教えることの興味も大きかった。MOSに合格するスコアへ到達するプロセスをサポートすることを通して、やってみたら苦手意識を払しょくできることを知らせ、PCが苦手な下級生でもチャレンジしてもらいたいとの思いもあり、志願した。志願者11名のうち9名が2015年前期に情報SAとして活動することになった。

2.3 2015年度の情報リテラシー系授業

本年度は「コンピュータリテラシーI」と「情報入門」の2科目を一人の教員が担当することになり、相乗効果を狙ったシラバスになった。前者が主にPCの基本操作を、また、後者は全般的な情報に関する知識の習得が目標であった。そこで情報SAは「コンピュータリテラシーI」と教員の要請に応じて「情報入門」でも1年生をサポートした。

3. SAの活動

3.1 目標

担当教員からの事前の注意事項として、操作方法を質問され際に、質問者からマウスを奪って操作してあげることは極力避けるように指導を受けた。それは、操作方法を教えるということは、本人が実際に「できるようになる」ことを目標とするためである。接し方などは、1年生から「先輩のようになりたい」という憧れや模範となる存在になってほしいという教員の要望に、マナーの授業で身につけた立ち居振る舞いを実践する機会だと気持ちを引き締めた。

また、学習者集団は、得てして個人差が大きいいため、対応にも差が出て当然であり、一人ひとりの状況を的確につかみ取ることも必要であると注意を受けた。

3.2 実践

情報SAが活躍する中心的な授業として、MOSの模擬試験があった。第6回目までの授業では、個人で練習問題を解き進めていたが、第7回目と8回目の授業において、一斉に模擬試験が実施された。この時は、模擬試験のアプリケーションソフトの使い方と、実際のExcelの問題の解き方の2種類のサポートが必要であり、模擬試験の終了時は、結果の情報収集作業も複雑で、SAが増員されていたが多忙であった。

5月末の第7回授業における第1回目の模擬試験では、試験問題の進め方について教員から指導があり、1年生はおおむね理解して、受験の途中で操作方法がわからなくなる学生はいなかった。途中でシステムかPCの不具合による質問はあったが、SAでは解決できなかった。試験が終了した後に、教員から間違った問題の解答を閲覧する方法の説明があったが、模擬試験の結果に一喜一憂する学生は、集中力を欠いてよく聞いておらず、

閲覧方法の質問が多かった。情報SAは、模擬試験を十分に経験していたので、適切にサポートできた。

この授業後に、教員から学習者としての意見を聞きたいと相談を受け、模擬試験の成績を伸ばすための教室の環境を相談した。

教員は、1年生に対して、わからない問題はまずテキストや解答を閲覧してやってみる、それでわからなければ、人を頼る、という段階を指導した。わからないという問題の解決に、教材と情報SAと教員が使えるが、1年生の立場では、頼る相手としては教員より情報SAを、また、情報SAよりも、学生生活で親しい友人のほうが、より気軽に相談できると考えた。そこで、友人同士が互いに教えあえる学習空間を提案した。教員は学生管理の都合と私語の増加を懸念したが、あえて、模擬試験の時間はPCルームの座席を、指定席から自由席に変更してみた。

その結果は、良い方向に現れた。まず、緊張感が緩和され、和気あいあいとした雰囲気になった。1年生同士で、相談をしながら解決する姿も見られ、情報SAを呼ぶ回数が減少したように感じられた。情報SAが多忙でなくなると、教員から情報SAに、不具合の解決方法を指導できる時間的なゆとりも出てきた。なおかつ、模擬試験の実施中は集中しており、かえって緊張と緩和のメリハリが良かったと感じた。

3.3 1年生の伸び

模擬試験初回の結果は平均スコアが32.9点と低く、1年生にも落胆の顔色であった。そこで、情報SAたちが順にそれぞれの経験を話して激励をした。

スコアの記録シートをモニタ画面に映し出して、はじめは点数が低く、所要時間も長かったが、繰り返すことによって短期間で点数が上がり所要時間が減少した事実を見せた。それを励みに繰り返してトライしたことを伝えた。1学年先輩が数か月前の体験を話すことは1年生には身近な例として説得力があったようだ。

折しも、短期大学2年生は就職活動中で、履歴書に記載したMOS Excel合格が、選考や面接でどのように有利であったかという話も、注目が集まっていた。

6月初めの第2回目模擬試験の結果は、平均スコアで73.5点と急上昇した。教員が太鼓判を押す合格ゾーンの正解率9割超は、136人中、初回1人であったが、2回目は30名と飛躍的に増加した(図1)。情報SAの激励が1年生のやる気を引き出し、1年生が努力をした結果である。

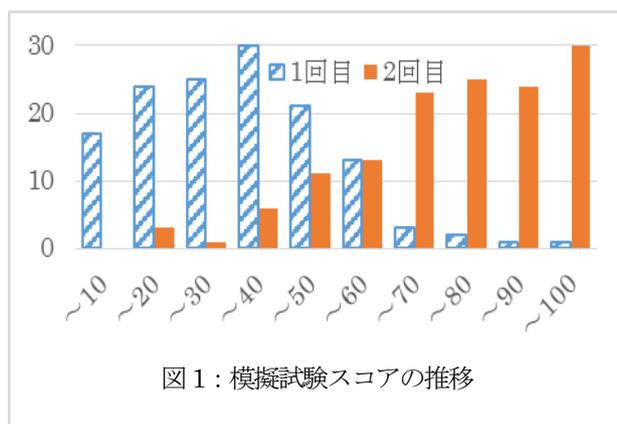


図1：模擬試験スコアの推移

3.4 SAの課題

1年生の急成長に、多くの情報SAは喜びつつ、まだ点数の振るわない学生への丁寧な対応を意識した。しかし、中には、アシスタントとして授業のサポートをさせてもらっている自覚が乏しく、私語が多いSAも存在する。教員からは折に触れて、良いSAの動きやサポートの例と改善すべき行動についてメールで連絡が来る。授業の手本と期待されているSAが反面教師として1年生の目に映っているかもしれない。SAは教員とともに1年生を見ているが、1年生からも見られていることを認識すべきである。

4. 考察

授業を支援する学生とは、もともと大学院生のTeaching Assistant(TA)であった⁽¹⁾。また、岩崎によると、一つの科目や授業だけではなく、大学の組織として多くの学生が登録をしてアルバイトのように雇われていることもわかった⁽²⁾。

当初、自分が先に学んだことを下級生に教えることで教員を補助するという認識でしかなかった。だから、学習者全員の前で、経験談を話すことに若干の抵抗があった。ところが1年生の伸びをデータで見た時には、純粋な気持ちで喜ばしく、また、やりがいを感じた。また、教員から授業という空間をどのようにしたら学生にとって好ましい状況になるのか相談を受けた時も、授業を構成する要素の一つとして、自分の存在を認めることができた。

先述のように、1年生の成績が上がった最大の要因は1年生の努力である。しかし、淡々と授業を進め、結果を提示するだけの場合を想像して今回の授業と比較するなら、努力をする人数や程度に差が出るであろう。なぜなら、「努力する」ためには、きっかけが必要で、そのきっかけは学習への意欲につながり、継続に影響すると考えるためである。特に苦手な分野であればなおさら、「努力する」までのハードルは高い。

教える側に立つと、モチベーションを左右する外的な要因があることが分かった。主体性を引き出すには、単にやり方を教えることではない。大学院生のレベルとは異なるであろうが、1年であろうとも、学習者に影響を与えるSAとして役に立てたことは今後の社会生活において、いろいろな面で活かせる。

5. おわりに

授業当初のリアクションペーパーから、もっとSAの方から近づいてきてほしいという要望があったが、学習者もSAや教員との距離感に遠慮や悩ましさを感じている。教員と学習者の間という立場を考えての取り組みであったが、得たものは大きく、また、学習者に近いからこそその影響の大きさが分かった。

参考文献

- (1) 北野秋男：“日本のティーチング・アシスタント制度、東信堂、(2006)。
- (2) 岩崎千明1, 久保田賢一2, 水越敏行3：組織的な教員支援としてのスチューデント・アシスタントの効果と課題、日本教育工学会論文誌, pp.77-80, (2008)。